

日本英文学会中部支部 第 65 回大会プログラム

日時 2013 年 10 月 5 日(土)・6 日(日)

場所 椋山女学園大学星ヶ丘キャンパス

464-8662 名古屋市千種区星ヶ丘元町 17-3

TEL: 052-781-1186(代表)

<http://www.sugiyama-u.ac.jp>

主催 日本英文学会中部支部

事務局 466-8666 名古屋市昭和区八事本町 101-2 14 号館

中京大学国際教養学部 武井研究室

TEL: 052-835-7111(代表) FAX:052-835-7183

E-mail: chubu@elsj.org

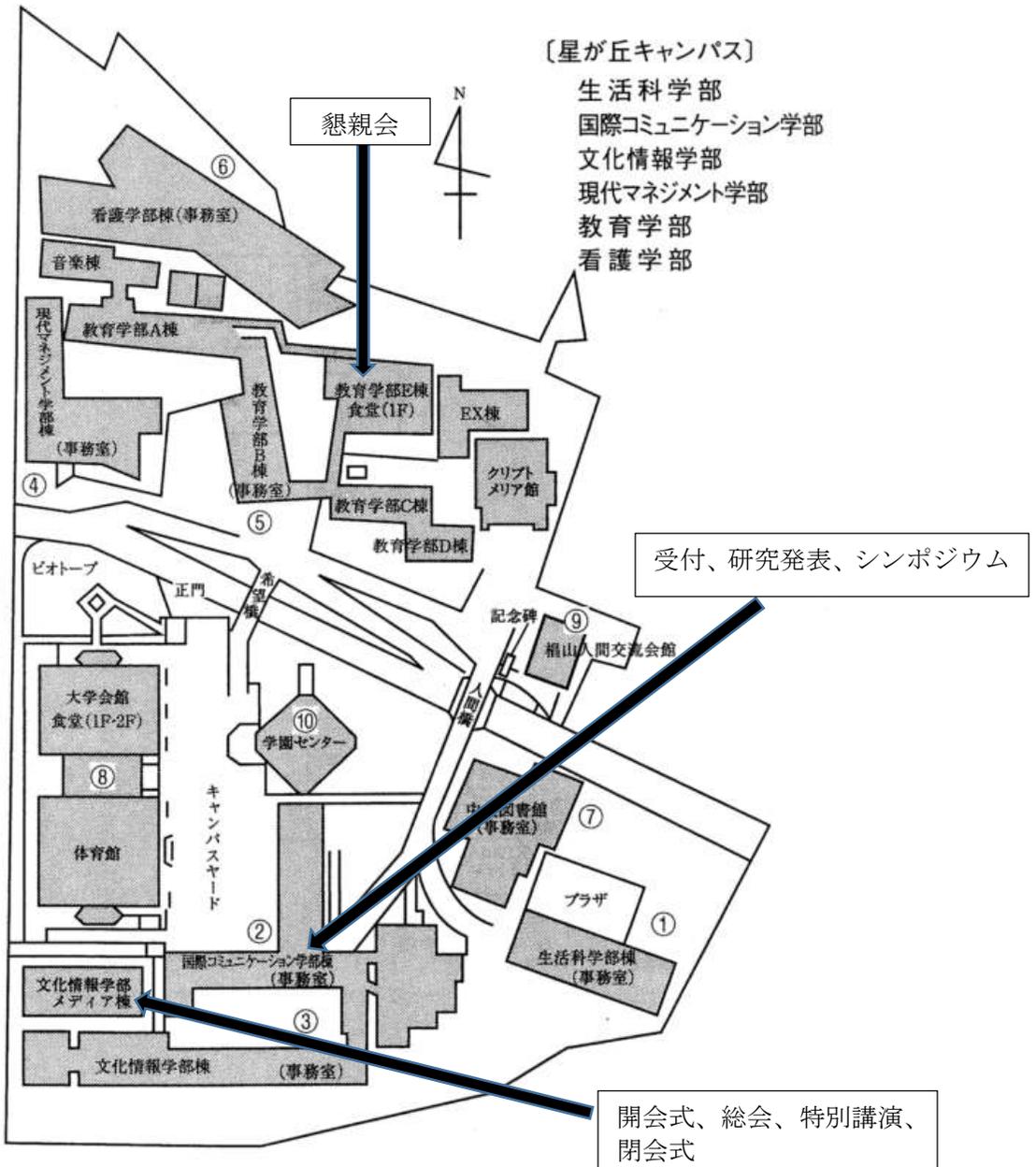
<http://www.elsj.org/chubu>

会場案内

交通アクセス

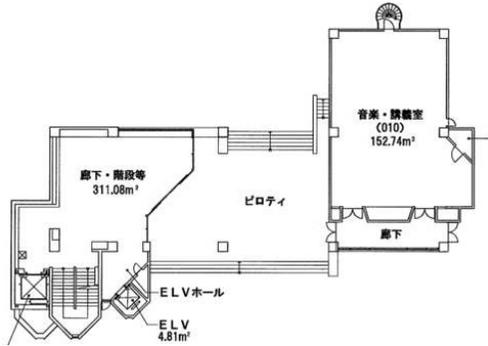
名古屋駅から名古屋市営地下鉄東山線で乗車 20 分、星ヶ丘駅下車
6 番出口より徒歩 5 分

キャンパスマップ

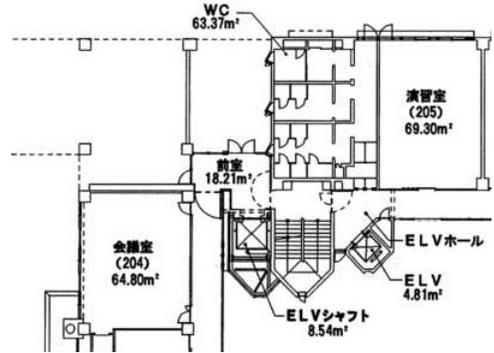


教室地図

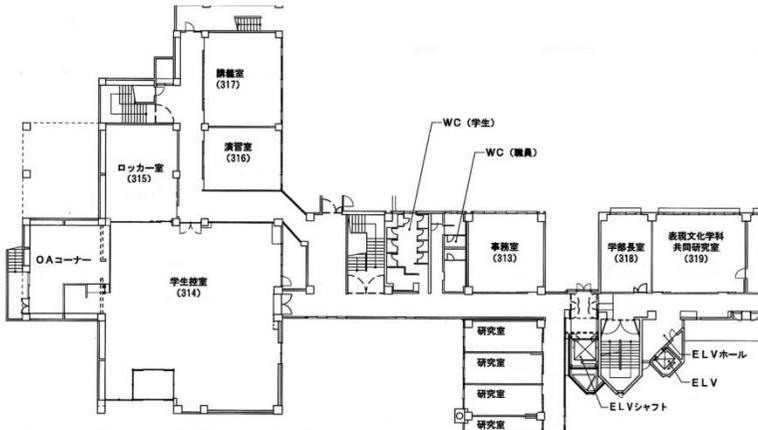
国際コミュニケーション学部棟 GF



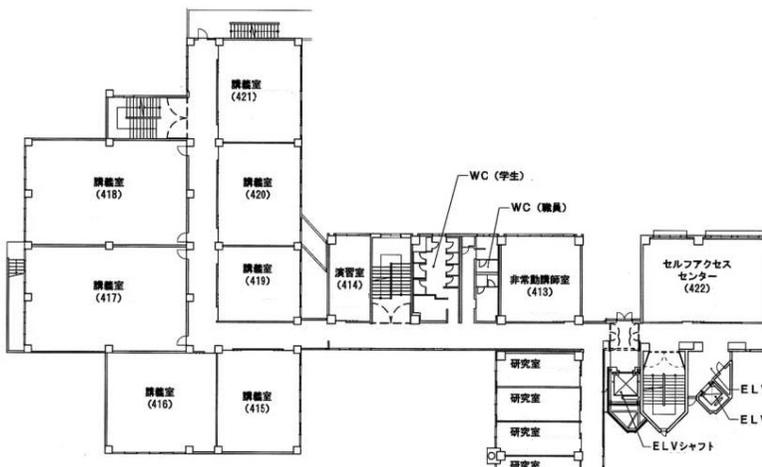
国際コミュニケーション学部棟 2F



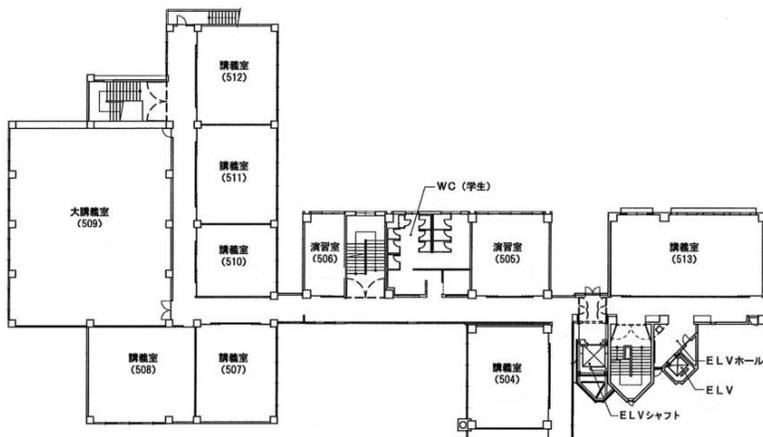
国際コミュニケーション学部棟 3F



国際コミュニケーション学部棟 4F



国際コミュニケーション学部棟 5F



*受付、研究発表、シンポジウムは国際コミュニケーション学部棟で行います。書籍展示場、控室、会議室も国際コミュニケーション学部棟の教室になります。

受付： G階ロビー

開会式・総会・特別講演・閉会式：
文化情報学部メディア棟 G001 教室

研究発表： 第1室 415 教室
第2室 416 教室
第3室 419 教室
第4室 418 教室
第5室 417 教室
第6室 420 教室

シンポジウム： 第1室 416 教室
第2室 417 教室
第3室 418 教室

特別講演講師控室： 318 室(学部長室)
シンポジウム講師控室： 414 教室(英語圏文学)、505 教室(演劇)、506 教室(言語学)
研究発表者・司会者控室： 507 教室
一般会員控室： 314 室(学生控室)

書籍展示場： 314 室(学生控室)

理事会・運営協議会室： 204 会議室

大会本部： 320 室(学生共同研究室)

懇親会： 教育学部 E 棟 1F 食堂

開催校からのお知らせ

【ご入構について】

来客用の駐車場が極めて限られておりますため、公共交通機関をご利用ください。
自動車でのご来校はご遠慮いただきますようお願いいたします。

【食事場所について】

大学内の食堂等は、土日は休業しております。
昼食等につきましては、星ヶ丘駅周辺の飲食店をご利用ください。
星ヶ丘駅から栢山女学園大学星が丘キャンパスへの途中にございます、「星が丘テラス」というショッピングモール内にも飲食店が多数ございます。

【周辺のコンビニ情報など】

大学内の売店も土日祝日は休業となっておりますため、駅周辺のコンビニエンスストアをご利用ください。
ペットボトルの飲料等は、一般会員控室の314室(学生控室)に自動販売機が設置されておりますので、そちらもご利用いただけます。

目次

スケジュール	1
プログラム	2
特別講演要旨	5
研究発表要旨	6
シンポジウム要旨	14
2013 年度日本英文学会中部支部大会役員一覧	19

スケジュール

第1日目 10月5日(土)受付 13:00～

開会式・総会[文化情報学部メディア棟 G001 教室]	13:30-14:00
特別講演[文化情報学部メディア棟 G001 教室]	14:10-15:10
研究発表	15:30-17:25
第1室[国際コミュニケーション学部棟 415 教室]	英語圏文学
第2室[国際コミュニケーション学部棟 416 教室]	英語圏文学
第3室[国際コミュニケーション学部棟 419 教室]	英語圏文学
第4室[国際コミュニケーション学部棟 418 教室]	言語学
第5室[国際コミュニケーション学部棟 417 教室]	英語教育学・言語学
第6室[国際コミュニケーション学部棟 420 教室]	言語学
懇親会[教育学部 E 棟 1F 食堂「F19」]	17:50-19:50
会費 4,000 円	

第2日目 10月6日(日)受付 9:30～

シンポジウム	10:00-12:30
第1室[国際コミュニケーション学部棟 416 教室]	英語圏文学
第2室[国際コミュニケーション学部棟 417 教室]	演劇
第3室[国際コミュニケーション学部棟 418 教室]	言語学
閉会式[文化情報学部メディア棟 G001 教室]	12:50-13:00

プログラム

第1日目 10月5日(土)

開会式[文化情報学部メディア棟 G001 教室] 13:30-13:40
開会の辞 日本英文学会中部支部長 梅 正行
開催校挨拶 椋山女学園大学人間関係学部教授 平野順雄
総会[文化情報学部メディア棟 G001 教室] 13:40-14:00
特別講演[文化情報学部メディア棟 G001 教室] 14:10-15:10
実践知性としての英文学 講師 関西大学教授 宇佐見太市
研究発表 15:30-17:25

第1発表 15:30-15:55 第2発表 16:00-16:25
第3発表 16:30-16:55 第4発表 17:00-17:25

第1室[国際コミュニケーション学部棟 415 教室]

- 司会 名城大学教授 宮北恵子
1. William Godwin の *The Juvenile Library* について
三重大学大学院 堀本孝子
 2. James Hogg(1770-1835)の作品における妖精・夢・魔法とスコットランド表象
三重大学准教授 吉野由起
- 司会 愛知学院大学教授 鈴木俊次
3. 「女の手」の芸術表象
W. ブレイクから E. ブロンテへ
筑波大学教授 今泉容子
 4. 変容するアリス
視覚表現を通してヒロインの変化を読み解く
名古屋女子大学短期大学部教授 杉村藍

第2室[国際コミュニケーション学部棟 416 教室]

- 司会 愛知大学教授 永瀬美智子
1. Melville 作品におけるキリスト教表象について
諏訪東京理科大学講師 奈良裕美子
 2. Floyd Dell の *The Briary-Bush*(1921)における放浪の意義
名古屋大学大学院満期退学 小林亜由美
- 司会 金城学院大学教授 楚輪松人
3. 「曲がり角」が重なるとき
日本における F. R. Leavis の受容をたどる
フェリス女学院大学大学院 畑中杏美
 4. 【招待発表】「自伝風小説」の記憶騙り
愛知淑徳大学教授 平林美都子

第3室[国際コミュニケーション学部棟 419 教室]

1. 発表なし
2. 発表なし

3. E. M. フォースターの *Maurice* における「書かれた言葉」の重要性
司会 金沢大学教授 山本卓
愛知学院大学大学院 安藤洋平
4. アイリス・マードック『鐘』の再読
道徳の可能性
愛知県立大学大学院 杉浦千秋

第4室[国際コミュニケーション学部棟 418 教室]

1. 同族目的語構文の統語・意味変化について
司会 静岡大学教授 大村光弘
藤田保健衛生大学講師 久米祐介
2. With 独立構文の歴史的発達について
名古屋大学大学院 杉浦克哉
3. 古英語における疑似空所化について
筑波大学助教 山村崇斗
4. 【招待発表】 There 構文の分析をめぐって
司会 中京大学講師 三上傑
静岡大学教授 内田恵

第5室[国際コミュニケーション学部棟 417 教室]

1. 戦後の高等学校英語教育における文学教材の在り方の遍歴
司会 愛知淑徳大学教授 樗木勇作
愛知教育大学大学院 柳瀬和音
2. 英語教育におけるリトールド版の意義と可能性
南山国際高等学校教諭 児玉恵太
3. 移動事象の把握と移動表現上の経路の明示について
司会 南山大学短期大学部准教授 石崎保明
認知的アプローチによる一考察
金沢大学大学院 田中瑞枝
4. 談話標識 I mean における認知語用論的プロセス
金沢大学大学院 小林隆

第6室[国際コミュニケーション学部棟 420 教室]

司会 福井大学教授 舘清隆

1. At の意味論

信州大学教授 加藤鉦三
信州大学准教授 花崎一夫
信州大学准教授 花崎美紀

2. Have の認知的な理解モデルとその考察

信州大学大学院 藤原隆史
信州大学大学院 赤羽佑太
信州大学大学院 脇淵良太
信州大学大学院 早野勇馬

3. 英語の未来表現の多義性とその多義を生じさせる条件の考察及びその効果的な教育法

信州大学大学院 脇淵良太
信州大学大学院 赤羽佑太
信州大学大学院 藤原隆史
信州大学大学院 早野勇馬

第2日目 10月6日(日)

シンポジウム

10:00-12:30

第1室[国際コミュニケーション学部棟 416 教室]

「土着性」と「近代性」?

「ポストコロニアル」文学を再読する

司会・講師 中京大学講師 杉浦清文
講師 四日市大学名誉教授 北島義信
講師 大阪大学教授 木村茂雄

第2室[国際コミュニケーション学部棟 417 教室]

大衆演劇とシェイクスピア劇

司会・講師 名古屋大学教授 滝川睦
講師 ハラプロジェクト主宰 原智彦
講師 元浜松医科大学教授 遠藤幸英
コメンテーター 椋山女学園大学教授 平野順雄

第3室[国際コミュニケーション学部棟 418 教室]

“コロケーション”研究の諸相

司会・講師 名古屋大学教授 大名力
講師 金城学院大学教授 森田順也
講師 静岡県立大学教授 寺尾康

閉会式[文化情報学部メディア棟 G001 教室]

12:50-13:00

閉会の辞

日本英文学会中部支部長 梅 正行

特別講演要旨

実践知性としての英文学

関西大学教授 宇佐見太市

日本は今、重篤な状況にある。特に若年層の正規職員への就職が困難を極めており、彼らを覆っている閉塞感は筆舌に尽くし難い。我々大学人は、活路を開くべく教育改革に邁進し、たとえば英語英文学関連で言えば、実践的言語コミュニケーション力育成を前面に押し出した。この結果、明治・大正・昭和を通じて人文学系の諸領域の牽引役を果たし、圧倒的な力と輝かしい実績を誇ってきた日本の英文学研究は、いくぶん時代に取り残された感があると言えよう。迷走し生彩を失いかけている今日の日本の英文学研究は、しかし、管見の限りでは、歴史と伝統に裏打ちされた尋常ならざる「何か」を秘めている。それを明らかにするためにも私は、温故知新の精神に則り、日本の英文学研究界を主導してきた過去の知の巨人たちの言説を傾聴するに如くはないと思う。これによって、今日の日本の英米文学界が抱える問題を剔抉し、社会性のある英文学の地平を開きたいと念ずる。

研究発表要旨

第1室[国際コミュニケーション学部棟 415 教室]

1. William Godwin の The Juvenile Library について

三重大学大学院 堀本孝子

Political Justice で自由主義思想を謳いあげた William Godwin は 1805 年、子供向けの書店を開業した。急進的思想と結びついた本名を避け、偽名を用いて *Fables; Ancient and Modern, The Looking Glass, The Pantheon or Ancient History of Gods* などの寓話、神話、歴史読み物などを執筆した。Godwin のほかに特筆すべき執筆者は Mary and Charles Lamb で *Tales from Shakespeare, The Adventure of Ulysses* などを著した。W. F. Mylius による辞書、William Hazlitt による文法書、Mrs. Fenwick による教訓物語など多彩な分野の出版物を手掛けた。また William Blake は挿絵を担当した。Godwin は良質な本を出版し好評を博したにも関わらず、1824 年、資金難と経営手腕のなさで The Juvenile Library は廃業に追い込まれる。19 世紀初期、際立つ存在であった Godwin の本屋について概観する。

2. James Hogg (1770-1835)の作品における妖精・夢・魔法とスコットランド表象

三重大学准教授 吉野由起

本発表は James Hogg(1770-1835)の一連の作品におけるスコットランド表象の特異性を主に「妖精」像を通し読み解く。Hogg が妖精・夢・魔法といった超自然的かつ前近代的なモチーフの独創的な造型法・用法を通して、いかに意図的に作品内で構築される物語の時間・空間の座標軸を揺るがすと同時に、表出されるスコットランド像を脱魔術化あるいは再魔術化し、イングランドとの合同後一定の時間が経過したスコットランドが様々な次元で直面したナショナル・アイデンティティを巡る不安・葛藤を前景化したかを検証する。加えて作品のいくつかが Walter Scott(1771-1832)の口承伝統の扱いに対する強い反発を原動力に書かれた点を指摘し、ともに極めて近代的な感覚を持ち口承伝統を著作における「方法的必然」として用いた両者が、口承伝統をいかに捉え、そこに何を託したのかをも考察したい。

3. 「女の手」の芸術表象

W. ブレイクから E. ブロンテへ

筑波大学教授 今泉容子

ピカソの「花束をもつ手」を思い浮かべるまでもなく、芸術において「手」は大きな役割を与えられる。ウィリアム・ブレイクも、「手」の表象にこだわった芸術家のひとりである。彼は作品のなかで人体の各部位に意味を付与したが、擬人化したのは「手」だけだった。Hand(手)と名づけられた「男」は、ブレイク複合芸術のなかに登場し、活躍する。しかし、その「男の手」(Hand)のほかに、じつは「女の手」が存在するのである。「女の手」は初期の作品においては見えにくい存在であるが、後期の作品になると強大な力をふるって人間を支配するようになっていく。「女の手」が確実に存在していることを、「男の手」との対比において明らかにしたのち、おなじ「女の手」がエミリー・ブロンテの『嵐が丘』に継承されていくことを考察したい。そして、ロマン主義文学(文学の映画化作品をふくめ)における「女の手」の解明へと進んでいきたい。

4. 変容するアリス

視覚表現を通してヒロインの変化を読み解く

名古屋女子大学短期大学部教授 杉村藍

よく知られているように、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』(1865)は、実在する彼の少女友達、アリス・リデルをモデルとし、アリスら姉妹と出かけたボート遊びの際の即興のお話をもとに生まれた「地底の国のアリス」(1864)が原型となっている。ここでキャロルは文章だけでなく挿絵も描いているが、『不思議の国のアリス』ではプロのイラストレーター、テニエルが挿絵を担当した。アマチュア写真家でもあったキャロルは、少女アリスを写真にも収めている。『不思議の国のアリス』は20世紀にはディズニーによってアニメーション映画(1951)に、また21世紀には再びディズニーにより実写とモーションキャプチャーによって映画化(2010)されている。

挿絵、写真、映画とさまざまな媒体で視覚的に捉えられ描かれる「アリス」は、その都度どのように変化しているのか。出版当時の服飾の流行なども踏まえながら、ヒロイン「アリス」がどのように変化していくのかを探る。

第2室[国際コミュニケーション学部棟 416 教室]

1. Melville 作品におけるキリスト教表象について

諏訪東京理科大学講師 奈良裕美子

アメリカはピューリタン神権制から啓蒙主義を経て民主制へ移行するが、アンティベラムアメリカは、ピューリタン・リヴァイヴアル、アルミニウス主義的信仰復興運動等、複雑な宗教的パラダイム・シフトを経験した時期であった。19世紀中葉迄にはキリスト教派勢力や聖書解釈にも変化があった。Melville の聖書解釈研究については、Nathalia Wright と Lawrence Thompson が草分け的存在であるが、Ilana Pardes は両者が聖書的観点か文化的観点を偏重した議論に終始していると批判する。Pardes は、Melville がカウンター・トラディショナルな聖書の再定義にこだわり、文化的に正当化された本への一新を試みたと主張する。本発表では、Melville 作品のキリスト教表象がいかにアメリカ社会の矛盾を前景化し、矛盾を「自然に」受容させるレトリックの転覆装置となっているかを考察する。

2. Floyd Dell の *The Briary-Bush*(1921)における放浪の意義

名古屋大学大学院満期退学 小林亜由美

Floyd Dell(1887-1969)はイリノイ州に生まれたアメリカ人作家で、生涯に11の小説を残した。デルの2作目の小説 *The Briary-Bush* はデルの作品で最も評価が高い前作の自伝的小説、*Moon-Calf*(1920)に続く自伝的な小説で、主人公 Felix Fay が作家としての成功を模索するストーリーを軸に、フェリックスの恋人である Rose-Ann Prentiss の生き方の模索が見られる作品である。本作品はフェリックスのモデルがデル自身であるため、フェリックスの成功や自由を求めて放浪する生き方が注目されるが、ダンサーになるという夢を抱いたり、家庭の外で人生を送りたいと考えたりして放浪するローズアンの存在も特徴的である。本発表では女性の自由に関心を寄せるデルが描くローズアンの放浪を論じ、そこに見られる女性の自由への期待とその限界を考察する。

3. 「曲がり角」が重なるとき

日本における F. R. Leavis の受容をたどる

フェリス女学院大学大学院 畑中杏美

アメリカ、イギリスにおける新批評の隆盛は日本の英文学研究にも大きな影響を与えた。しかし 1950 年代には、新批評は「曲がり角にきた」とされ、いわゆる“symbol hunting”に徹してしまいがちであることや、その手法を小説読解に持ち込む是非などが日本の英文学研究誌でも議論の対象となっていた。たとえば当時の『英語青年』には、F. R. Leavis をイギリス新批評の流れに属する偏狭な批評家として批判する声がある一方、彼の業績を評価し、1953 年の雑誌 *Scrutiny* 廃刊を嘆く記事なども見受けられる。Leavis が主張し続けた文学批評の危機と、日本の英文学者たちが懸念していた批評の「曲がり角」をあわせて分析することで批評行為の問題点をあぶりだすことができる。本発表では、英文学研究誌を中心に、Leavis の批評が日本においてどのように受容されてきたかを問い直し、その価値を改めて考えていきたい。

4. 【招待発表】「自伝風小説」の記憶騙り

愛知淑徳大学教授 平林美都子

20 世紀後半以後の自伝/ライフ・ライティングの流行とともに、「自伝風小説」も流行してきた。「私」が自分について語る「自伝風小説」には従来の写実小説における語りの信頼性が欠如している。20 世紀後半の世界観の変化から生じた自己の起源・定義と表象に潜む問題が近年の関心事となっている。自伝は、記憶を語ることによって過去の自分を再現するだけでなく、語っている現在の自分による考察も含まれている。こうした自己再帰性は、記憶と意識作用という認識論上の問題、さらに方法論上の問題も浮き彫りにしていく。本発表では「自伝風小説」が抱える自己再帰性の問題を考えながら、記憶語りの騙り性を論じたい。一例として 2011 年にブッカー賞を受賞した Julian Barnes の *The Sense of an Ending* を取り上げる予定である。

第 3 室[国際コミュニケーション学部棟 419 教室]

1. 発表なし
2. 発表なし

3. E. M. フォースターの *Maurice* における「書かれた言葉」の重要性

愛知学院大学大学院 安藤洋平

E. M. Forster (1879-1970) の *Maurice* (1914/71) が、主人公 Maurice が Clive との禁欲的な精神的つながりを重んじる(プラトニックな)同性愛関係とその失敗を経て、Alec との(Edward Carpenter が称揚する)肉体的な愛を結ぶまでを描く、異性愛規範や性の言説もしくは哲学的な男同士の愛を棄却・超越する愛に価値を置く作品であることはすでに指摘されている。そうした指摘を踏まえテキストを讀んでみると、モーリスの性の目覚めからアレクと結ばれるに至るまで、彼が超えることになる性の言説を訓えるものとしての聖書や哲学的愛の教典としてのプラトンだけでなく、宇宙進化論、チャイコフスキーの伝記、手紙まで、テキストには「書かれた言葉」が、哲学に対峙するものとしての直観や夢や自然や身体性と同じように、モーリスの精神発達や登場人物たちの関係にとって重要なものとなっていることが分かる。本発表では、このような観点から、『モーリス』を今一度、再読してみたい。

4. アイリス・マードック『鐘』の再読 道徳の可能性

愛知県立大学大学院 杉浦千秋

アイリス・マードック(Iris Murdoch, 1919-99)没後十余年を経て、近年再評価の論評が相次いでいる。本発表では初期の傑作と目される『鐘』(*The Bell*, 1958)に関する三つの論文を取り上げる。ほぼ二十年の間隔で書かれており、*Degrees of Freedom*(1965)の著者 A. S. Byatt は宗教と性について意欲的な物語だと述べ、*Iris Murdoch*(1987)の著者 Deborah Johnson はマードックには珍しく女性を中心に据えていることを指摘し、さらに *Iris Murdoch: Philosophical Novelist*(2010)の著者 Miles Leeson は『鐘』とマードックの道徳的生き方の背景はプラトン思想であるとして、プラトンの洞窟の比喩や物語中の「正しい生活」の説教に言及する。発表者は『鐘』の再読に当たり信仰会の崩壊とともに成長するドーラに焦点を当て、各論文におけるドーラの道徳的成長の評価を比較検討するとともに、『鐘』で描かれるマードックの道徳観が時代を超えて論評される普遍性を考察する。

第4室[国際コミュニケーション学部棟 418 教室]

1. 同族目的語構文の統語・意味変化について

藤田保健衛生大学講師 久米祐介

現代英語には、live a happy life のように、動詞がそれと同族の目的語を選択する同族目的語構文がある。Jones (1988)は、同族目的語は受動化を受けないことから、付加詞であると主張している。一方、Massam (1990)は、同族目的語は主題役割を受ける項であり、受動化できないのは同族目的語が付加詞であるからではなく、束縛変項であるからだと主張している。さらに、Matsumoto (1996)は、同族目的語が指示的な場合には項(DP)であり、非指示的な場合には、付加詞(NP)であると論じている。本発表では、Matsumoto の主張を同族目的語構文の歴史的発達過程から裏付ける。古英語では、同族目的語は主に対格で現れる場合と前置詞+与格で現れる場合がある。近代英語では、前置詞は消失し、対格と与格の形態的な区別もなくなる。このことから、現代英語の指示的な項としての同族目的語は対格目的語から生じ、非指示的な付加詞の同族目的語は前置詞+与格から生じたと主張する。

2. With 独立構文の歴史的発達について

名古屋大学大学院 杉浦克哉

現代英語では(1)に挙げるように、with が補部に NP + XP を選択し、with 句が文頭の位置を占める文が存在する。

- (1) a. With everybody yelling about taxes (these days), it's no wonder that the mayor is trying to cut the budget. (McCawley(1983: 275))
- b. With John arrested again, we've got troubles galore. (Napoli(1988: 343))
- c. With his wife (still) in Florida, Mike feels lonely. (McCawley(1983: 275))

本発表では with 独立構文の英語史における出現と発達について、歴史コーパスから得たデータに基づき議論する。中英語以降使用された付帯的な意味を表す with -ing 句は、16 世紀に文末だけでなく文頭の位置も占めるようになった。その後 17 世紀に-ing 句は顕在的な NP を主語として持ち、with NP -ing 型の独立構文が現れた。これと同時期に-ing からの類推により with NP pastparticiple 型の独立構文も使用されるよう

になり、さらに・ing/pastparticiple からの類推により、18 世紀後半から前置詞句も使用されるようになったと提案する。With 独立構文において、with の補部が対格主語動名詞である場合、統語構造は TP であるが、対格主語動名詞以外の場合は小節であると提案する。

3. 古英語における疑似空所化について

筑波大学助教 山村崇斗

現代英語の疑似空所化は、VP 内要素が VP 外へ移動した後に動詞句(VP/vP)を削除するという、動詞句省略の一種として一般的に分析される。当該の移動操作には諸説あり、Jayaseelan(1990)は重名詞句転移(HNPS)、Lasnik(1999)は目的語移動(OS)だと分析しているが、Takahashi (2004)は両方の可能性も認め、Fox and Pesetsky(2003, 2005)の線形化の理論に基づく新たな分析を提案している。

F & P(2003, 2005)や Takahashi(2004)は、V 移動のない現代英語において生じうる語順の矛盾を解消するための PF 削除操作を提案しているが、この分析は V-to-T(to-C)移動がある古英語には疑似空所化がないと予測する。本稿では史的電子コーパスを用いた調査の結果を提示し、この理論的予測の妥当性を検討する。

4. 【招待発表】 There 構文の分析をめぐって

静岡大学教授 内田恵

There 構文は、1)派生経路について、2)現れる動詞特性について、3)情報構造理論にまつわる機能特性についてなど興味深い話題を包括している。

本発表では、上記の問題について、語用論・機能構文論の立場から高見・久野(2002)で提案されている分析などに基づいて問題点を検討する。

a. There 構文に用いられる動詞には、be 動詞のほか一般動詞があるが、自動詞と他動詞の区別なく用いられることがあるのか。

b. There 構文に現れる意味上の主語名詞句は新情報を担うことが多いが、形態に対する制限はあるのか。

c. 一般動詞が用いられる there 構文には、要素の配列が特殊に見える例が存在するのはなぜか。

さらに、上記の観察と関連して派生にまつわる議論を展開したい。

第 5 室[国際コミュニケーション学部棟 417 教室]

1. 戦後の高等学校英語教育における文学教材の在り方の遍歴

愛知教育大学大学院 柳瀬和音

近年、高等学校の英語教育では文学作品を読むことは非常に少なくなった。しかし、文学は英語教育において異文化理解や英語読解力に非常に役立つ教材だと考える。そこで文学が英語教育の中心であった昭和 20～30 年代の高等学校において、英語教育の目標がどのように移り変わったのか明らかにし、英語を学ぶ上で文学作品がどのような役割を持っていたか考察する。分析方法として、昭和 22 年からの高等学校学習指導要領の内容を改訂ごとに分析し、英語科の目標の内容、読みの指導や文学作品に関して記述されている部分に焦点を絞り遍歴を読み取る。また、その時代に使われていた英語教科書を改訂ごとに数種類用いて内容を分析し、それぞれの指導要領に掲げられている目標と教科書の中身が一致しているか、取り上げられている文学作品の種類や量などを明らかにする。

2. 英語教育におけるリトールド版の意義と可能性

南山国際高等学校教諭 児玉恵太

本研究の目的は、リトールド版の読解を通じて初・中級レベルの学習者が原文の文学言語にどのような気付きを形成するのかを調査し、リトールド版が原作の理解にどの程度役に立つかを明らかにすることである。リトールド版は様々なレベルの生徒に対応できるように語彙がコントロールされているため、高校生を含めた学習者に広く用いられている。一方で、リトールド版は原作に大幅な変更・削除を施しているために原文の持つ「文学らしさ」(literariness)が損なわれていると指摘されている。そこで本研究では初・中級レベルの高校生 28 名を対象に *Jane Eyre* のリトールド版を授業で用いて内容を把握した上で原作の一場面を読み、学習者が原文にどのような反応を示し、どの程度原文を理解することができるか質問紙調査とインタビューを用いて調べ、初・中級者に対してリトールド版を文学教材として活用することの意義と可能性を検討する。

3. 移動事象の把握と移動表現上の経路の明示について

認知的アプローチによる一考察

金沢大学大学院 田中瑞枝

類型論では経路を、明示的場所と関係し移動物が通過する道とし、経路が表される構造によりパターンを分類してきた(Talmy 1991, Croft 2010 etc.)。そして英語は経路がサテライト上で表される言語とされる。しかし(1a)の様な表現の‘home’を経路と場所が既に融合した概念としており、場所を参照し経路を位置づけるという定義に反する。また認知文法においてプロファイル関係の焦点とするトラジェクターやランドマークの典型(1b)からは外れながらも、経路の明示なく移動を表す表現が存在する(1a)(2)。

(1)a. She drove home. (Talmy 1985)

b. She drove my car.

(2)The boat shot the rapid.

本発表では必ずしも経路が構造上に現れるとは限らず、移動物や場所からの推測によって現れる可能性があることを示し、それはパースペクティブの違いによることを主張する。

4. 談話標識 I mean における認知語用論のプロセス

金沢大学大学院 小林隆

談話標識 I mean について、これまで語用論的観点から様々な機能が指摘されているが、その機能に関わる認知的プロセスは説明されてこなかった。本発表は I mean が用いられる際の認知プロセスを、Langacker(2008)の「現行談話スペース(CDS)」を援用し、認知的に統一的に説明することを目的とする。CDS とは言語使用の際に話し手と聞き手が共有するすべてを含む概念であり、談話の進行とともに常に更新されていく。Schiffrin(1987)のメタ言語/メタ会話的機能は、I mean より前の発話が CDS 内の既存のフレーム(MF)内で話し手と聞き手の間ですでに共有されている情報か、未共有の情報かの違いである。Brinton(2008)の挙げる具体的な機能は、MF の情報と焦点フレーム内の情報との具体的な関係の慣習化における違いであり、その関係性がゼロなのがファイラーとして機能する I mean であると言える。

第6室[国際コミュニケーション学部棟 420 教室]

1. At の意味論

信州大学教授 加藤 鉦三
信州大学准教授 花崎 一夫
信州大学准教授 花崎 美紀

前置詞 *at* は多義的であり、中核的な意味は「点」とであるとされている。しかし、もし *at* の中核的な意味が<点>であるとしたら、例えば *he is at work* のような<従事中>の用法で、*work* は点でなければならなくなる。また、*I was surprised at the news* のような<感情の原因>の用法で、*the news* はいかなる意味で点なのだろうか？このように、*at* の意味を「点」とであるとする立場は支持できない。更に、もし *at* に「感情の原因」という意味があるとしたら、その意味は「点」からどのように派生されるのだろうか。また、*he shot at the target* では「狙ったが当たっていない」という意味になることがよく知られているが、そのような意味をも *at* に想定すべきなのだろうか？

本発表では、*in* や *on* や *through* と違って *at* は目的語の形状を規定しない、という観察を出発点とする。「点」ではなく「特定する」が *at* の意味であり、かつその意味しかない、という分析によって、上記の問題が初めて自然に説明されることを主張する。

2. Have の認知的な理解モデルとその考察

信州大学大学院 藤原 隆史
信州大学大学院 赤羽 佑太
信州大学大学院 脇淵 良太
信州大学大学院 早野 勇馬

現在英語の使役表現には *make*, *have*, *let*, *get* などを用いたものがある。久野・高見(2005)や今井(2010)の説明によれば、これらの動詞はその直後にくる *O+(to)V* で表される事象を *make* であれば「作る」、*let* であれば「容認」などと説明される。一例を出すと、*I make him go.* は *I make a cake.* の目的語部分を「*O* が *V* する」という事象に置き換えたと解釈すると説明している。ただしその説明では *have* であれば「*O* が *V* する」事象を「持つ」と説明されるため、例えば、*He had the doctor look at his leg.* (Forest 英文法)は *He had a pen.* の目的語部分を「医師が足を診る」という事象に置き換えたと解釈すればよいことになるが、この解釈は「持っている」という意味にしかならず使役の意味にするためには何らかの装置が必要である。

本発表では *have* の意味とその性質について、認知的な理解モデル及び「一つの意味から他の意味を派生させる要素または条件」という観点に基づいて発表する。

3. 英語の未来表現の多義性とその多義を生じさせる条件の考察及びその効果的な教育法

信州大学大学院 脇淵 良太
信州大学大学院 赤羽 佑太
信州大学大学院 藤原 隆史
信州大学大学院 早野 勇馬

will, *be going to*~, *shall* などの未来表現の使い分けは英語学習者にとって最も習得が困難な用法の一つである。例えば次の文、*The ice will/*shall/*is going to melt if the sun comes out.* (安藤 2005)における *be going to*~が非文である理由を説明できる学習者は少ないのが英語教育の現状である。Sweetser(1990)は助動詞を根源的用法と認識的用法に分け、

根源的から認知的用法への写像による助動詞の意味の変化を謳っているが、必ずしも根源的から認知的用法への写像を解さずとも意味の多義は「一つの意味から他の意味を派生させる要素または条件」という概念を基に説明できると考える。

今回はこの「一つの意味から他の意味を派生させる要素または条件」という考察に基づいた、学習者がより容易に英語学習ができるような未来表現の教え方を、法助動詞及び未来表現の先行研究を概観しつつ示し、その教育効果を実証する。

シンポジウム要旨

第1室[国際コミュニケーション学部棟 416 教室]

「土着性」と「近代性」？

「ポストコロニアル」文学を再読する

司会・講師 中京大学講師 杉浦清文
講師 四日市大学名誉教授 北島義信
講師 大阪大学教授 木村茂雄

これまで、「ポストコロニアル」文学・思想は、「土着」と「近代」の関係性を繰り返し問題としてきた。「近代化」がエゴイスティックな植民地主義の思考と共犯関係にあるという事実は、多くの「ポストコロニアル」作家・知識人の告発するところである。だが、地球規模で展開している、現在の「近代化」のプロセスは、グローバル資本主義と結託するなかで、より複雑な様相を呈している。こうしたなか、「土着化」に内在している<反>近代化の志向性は、<新>植民地主義の求心力と巧みな戦略に囲込まれるしかないのだろうか。本シンポジウムでは、インド・パキスタン、アフリカ、カリブ海地域等を文化・歴史的背景に持つ文学作品および思想に焦点を当て、「土着」、「近代」という概念を再検討していきたい。(文責 杉浦)

カリブ海地域における「借り物の文化」史 Jamaica Kincaid の *A Small Place* (1988) を読む

杉浦清文

「西インド諸島の人間は借り物の文化の中で生きている」——かつて、V. S. Naipaul はカリブ海地域の文化的特徴をこう述べ、物議を醸した。しかし、「西インド」、「カリブ」と暴力的に名指されたトポスから、「土着」と「近代」の概念を再考する際、ひとまず、Naipaul のこの「借り物の文化」という表現から多くの示唆を得ることができるだろう。本報告では、この地域の「借り物の文化」史に着目しながら、とりわけ、Jamaica Kincaid の *A Small Place* (1988) を読んでいく。この作品は、奴隷制という西欧植民地主義の残虐な過去の歴史だけでなく、現在にかかわるツーリズムの問題、いわばグローバル化時代の<新>植民地主義の傾向をも暴露しており、今日でもアクチュアルな問いを投げ続けている。果たして、カリブ海地域において、「近代」のイデオロギーから解放された、純粹無垢な「土着」は存在するのだろうか。

インド・パキスタン、アフリカの英語文学における「土着」と「近代」

Hanif Kureishi, Mohsin Hamid, Ngugi wa Thiong'o の小説・評論を通して

北島義信

パキスタン人やアフリカ人が現実には、欧米中心の「近代」に向き合う際に生じるのは「同化」「反発」である。Hanif Kureishi の *The Black Album* (1995) では、英国社会で侮蔑されたパキスタン人二世の、「イスラーム原理主義」による自己確立の悲劇が描かれている。Mohsin Hamid の *The Reluctant Fundamentalist* (2009) では、パキスタン人 Changez が合衆国のグローバル支配の先兵的役割を果たしていることに気づき、共生に基づく闘いに至る過程が描かれている。彼らの「欧米近代」批判には土着文化が密接に関わっている。Ngugi は、*Something Torn and New* (2009) において、植民地支配

による断片化されたアフリカの全体性回復には、土着文化・口承文学が必要であることと、そこに込められた過去への哀悼を強調する。Hamid の小説には「共有化された痛み」に基づく、支配／被支配の対立を超えた哀悼の必要性が読み取れる。本報告では、「近代再構築」における土着文化の意義を明確化したい。

土着と近代、差異と普遍、ローカルとグローバル その狭間の理論と文学

木村茂雄

「普遍的」とはヨーロッパの「地方主義」の主張に他ならないと喝破したのは、1970年代半ばのチヌア・アチェベである。その数年後、グギ・ワ・ジオンゴは、まったく別の立場から、英語というグローバル言語を離れ、土着の言葉で書くことを宣言した。1980年代から90年代には、固着化したネイティヴィズムやアイデンティティ・ポリティクスの「差異主義」が問題視される一方、グローバリゼーションの動きが本格化する。そして21世紀の現在、土着と近代、差異と普遍、ローカルとグローバルの関係に対する新しい認識や表現が、ポストコロニアル理論・文学における最重要課題の一つとされているように思われる。この問題を、ガヤトリ・スピヴァクが昨年出版した大著 (*An Aesthetic Education in the Era of Globalization*, 2012)、今世紀に出版されて話題を呼んだ2編の移民小説 (Monica Ali, *Brick Lane*, 2003; Kiran Desai, *The Inheritance of Loss*, 2006)を通して見つめてみたい。

第2室[国際コミュニケーション学部棟417教室]

大衆演劇とシェイクスピア劇

司会・講師 名古屋大学教授 滝川睦

講師 ハラプロジェクト主宰 原智彦

講師 元浜松医科大学教授 遠藤幸英

コメンテーター 椋山女学園大学教授 平野順雄

興味深いことに、シェイクスピア劇の主人公が自己言及的な身振りをするとき、シェイクスピア劇の出自—大衆演劇—が明らかにされる。出自を確認することで、まるで芝居そのものがほっと安堵のため息をつくかのように。例えば、『ヴェローナの二紳士』のジュリア。彼女が「ジュリアの衣装をかりて」聖霊降臨祭の祝日にアリアドネの役を演じたと述懐するとき、この劇自体が、降臨祭を彩る民衆劇に変貌するのを我々は目撃する。『アントニーとクレオパトラ』で女王が、ローマではキーキー声の少年俳優が「娼婦の媚態でクレオパトラを演じる」だろうと予言するとき、「脂じみた前掛けをつけ、物差し、槌」を手にした職人たちが、約400年前のグローブ座でこの芝居を観劇している姿を我々は想像しているのだ。本シンポジウムは、日本の古典芸能、現代演劇、そして前衛芸術を自家薬籠中の物としてきた演者や研究者を講師に迎えて、大衆演劇としてのシェイクスピア劇に迫る。(文責 滝川)

「演劇」で悩むより「芝居」で楽しむ

原智彦

「大衆演劇」は私なりの解釈では、「楽しむ事を大切にした芝居」です。「ポップアート」と置き換えることもできます。対極が「観念アート」とすると、私は明らかに前者「大衆芝居」を演っています。大雑把に言うと、中世・近世は前者、近代以降は後者となります。

そもそも私が芝居を始めたきっかけは、オモシロイ事をやり続けていたら「カブキ」にたどり着いたことでした。30歳頃、私の「脳内ケモノセンサー」が、このまま世の中が進歩し続けると「ヤバイゾ！」と働き、江戸時代の芝居に居所を見つけたのかも知れません。

以後35年間、「作って楽しい」「見てオモシロイ」芝居を演り続け、『マクベス』、『リア王』などシェイクスピアの4作品をめぐるツアーを、ヨーロッパの約40都市で行いました。印象的な批評に、「新旧東西の交差点」とあり、ウマイ事を言うなと思いました。

演ずる側の立場で感じてきた事をお話します。

演劇鑑賞と芝居見物

「芸術」対「娯楽」の対立図式をこえて

遠藤幸英

こと芸能・芸術に関しては、伝統的序列概念を根底から揺るがしたポストモダンの時代をへた今も **high vs. low culture** という対立図式が残存しているようだ。高度な美的感性と精神性に裏打ちされた芸術と違い、芸能は概して文化的価値の低いものと見られている。

しかし、そういう芸能のジャンルからも排除されているのが月単位で日本各地を移動公演する通称「大衆演劇」である。サブカルチャーの最底辺にひっそりと生息する大衆演劇は知性や教養など無用の低俗な娯楽に分類されたままである。

とはいえ躍動的で猥雑さにあふれる大衆演劇は歌舞伎だけでなく日本の演劇の原初形態といえる散楽、田楽、猿楽の生命力を今に伝えている。そればかりでなく洗練されない粗野な外見とはむしろ逆に深い人間性の洞察力を見せることがある。のっぴきならない状況に置かれた人物を描くことで人間の生の意味を問うという重い課題に取り組むのだ。

大衆演劇シェイクスピアと女形

滝川睦

日本の現代演劇を例に挙げるまでもなく、大衆演劇の魅力は女形や女装の力に負うところが大きいと言えよう。近代初期英国においては、ジェームズ一世の治世を寿ぐ宮廷仮面劇の舞台に、宮廷の女性が役者として登ったのに対し、シェイクスピアが活躍した公衆劇場では女性の役者が役作りに励むことはなかった。そして女形である少年俳優には、強烈なセクシュアリティが纏わりつき、彼らは独特のエロティシズムを発散させていたようだ。上の「要旨」で言及したクレオパトラが、「娼婦の媚態で」少年が自分を演じるだろうと喝破していたことを思いだしてみよう。『ヴェローナの二紳士』のジュリアもしかり。演劇反対論者スティーヴン・ゴッスンが『芝居、五幕にて論破されり』(1582年)において舞台上のアリアドネと骨がらみになっているセクシュアリティを徹底的に糾弾しているからだ。大衆演劇としてのシェイクスピア劇の女形を

めぐるホモエロティクスについて考察する。

第3室[国際コミュニケーション学部棟 418 教室]

“コロケーション”研究の諸相

司会・講師 名古屋大学教授 大名力

講師 金城学院大学教授 森田順也

講師 静岡県立大学教授 寺尾康

最近では、コーパスの普及・大規模化も手伝い、コロケーション研究が盛んとなっており、その成果は辞書の記述などにも活かされているが、論文、書籍等で扱われているものを詳細に検討してみると、種々雑多なものが一括りに“コロケーション”として扱われていることがわかる。“コロケーション”とは何なのか。本シンポジウムでは、これまでとは少し違った角度から捉え直し、“コロケーション”について考えてみたい。(文責 大名)

“コロケーション”を解体し、統合する

大名力

元々 collocation は動詞 collocare (< con + locate) 「一緒に置く」の名詞形で「一緒に置くこと、置かれたもの」を意味するが、“コロケーション”はもっと狭い特定の関係にある語と語の結び付きのことを指すのが普通である。しかし、具体例を示されるとわかった気になりやすく、実用的にはそれで問題が生じないことが多いためか、問題の要素間の関係が明示されず、種々雑多なものが区別されずに一括りに“コロケーション”と呼ばれているのが現状である。このような現状を踏まえ、本発表では、“コロケーション”について、何と何の間の共起関係なのか、共起性を引き起こす要因は何か、そのような共起性は語のレベルに限られるものか(形態素・句・文・談話でも見られる関係か)などの観点から検討、整理を行う。

語の内部に見られるコロケーション 形態素間の共起関係とメンタルレキシコン

森田順也

ある語が特定の語と密接に結びつく統語的連語関係はよく知られているが、特定の接辞同士の親密性を示す、形態的コロケーションも一般に指摘されている。例えば-able/-al/-ic で終わる形容詞は、ほぼ独占的に-ity によって抽象名詞化される(Jespersen(1942), Aronoff(1976), Fabb(1988))。本発表の目的は、形態素間の親近性にどのような規則性が認められるか、そしてそのことが語形成やメンタルレキシコンの構成にどのような影響を与えるかを明らかにすることにある。Lehnert の逆引き辞典と BNC 検索によって得られる英語派生語の豊富なデータに基づき、接辞間の共起関係が、線状的・階層的に隣接した領域内でのみ可能であること(「隣接性条件」Allen(1978))を実証した後で、同共起関係と「阻止の原理」により関連する語形が規則的に決定され、簡潔なレキシコンへと導かれることを提示する。

言語産出研究からみるコロケーション

寺尾康

意図が音声化されるまでの発話のメカニズムを考えると、コロケーションの存在は、概念が語彙として選択される過程で生じる興味深い課題を示してくれる。古典的な例でいえば、**strong air currents** と **high winds**、**fall into disuse** と **sink into oblivion** のそれぞれペアにおいて、ほぼ同じ概念を伝えるのに **strong** と **high**、**fall** と **sink** が取り替え不可能であるということは、まだ語彙化がすんでいないかもしれない後続の語によって当該語彙の選択が左右されている可能性を示唆しており、これは広く認められている二段階言語産出モデル(Levelt モデル)でもうまく扱えない。一方でこれらを単純に記憶や規則学習の問題に帰着させてしまうことも難しい。本発表では、反応時間測定や誤イディオム誘引を行った実験、加えて自然発話で生じた言い間違い等の証拠を検討しながら、通常の話連鎖単位とコロケーションやイディオムとの段階的差異も取り込んで説明できる最適モデルを考えてみたい。

2013 年度日本英文学会中部支部大会役員一覧

支部長

榎正行

副支部長

松本三枝子

事務局長

武井暁子

事務局長補佐・HP 担当

杉浦清文

書記

三上傑

理事(兼運営委員)

内田勝

内田恵

川村亜樹

鈴木達也

滝川睦

武井暁子

田中智之

榎正行

花崎美紀

平野順雄

松本三枝子

宮地信弘

山本卓

吉田江依子

運営委員

石川一久

大村光弘

大室剛志

澤田茂保

水光雅則

杉野健太郎

鈴木俊次

楚輪松人

大工原ちなみ

舘清隆

永瀬美智子

中村正廣

新妻明子

橋本恵

羽澄直子

平林美都子

米山優子

開催校委員

長澤唯史

平野順雄

深谷輝彦